慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	生活史研究の視角
Sub Title	
Author	有末, 賢(Arisue, Ken)
Publisher	慶應義塾大学法学部
Publication year	1983
Jtitle	慶應義塾創立一二五周年記念論文集 : 法学部政治学関係 (1983. 10) ,p.345- 366
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BN01735019-00000002-0345

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

生活史研究の視角

有末　賢

一　序――現代社会学と生活史研究――
二　生活史研究の歴史的概観
三　生活史の主題と方法の交錯
四　生活史研究の四つの視角
五　結語――生活史研究の課題――

一　序――現代社会学と生活史研究――

現代社会学のさまざまなパラダイムに対して、現在、多様な反省と批判が展開されている。T・クーンの『科学革命の構造』（一九六二年）に端を発した、科学者集団とパラダイム概念の提起、及び科学史・科学哲学上での従来の「累積による発展」という科学観に対して、非連続な「革命」による科学の歴史を主張する方向が、広く社会科学に対する今までの方法論に反省を促したわけである。[1] こうした「パラダイムの危機」という考え方は、まず第一に、一九六〇年代後半以後のさまざまな「社会問題」の噴出という現実と密接に結びついた問題意識から発している。理論と調査双方の総体としての社会学が増々細分化され、専門化していく中で、社会紛争、学園闘争、公害問

題、生態的危機、第三世界と南北問題などのさまざまな現実の問題に対して有効な対応がなされていないのではないかという反省である。こうした社会的危機を「変化の可能性としての危機」としてとらえ直す社会学内部の動きとしては、第二に「批判的社会学」(Critical Sociology)の台頭を指摘することができる。例えば、T・パーソンズらの構造—機能主義に代表される「アカデミック社会学」と国家社会主義の公的イデオロギーとしての「マルクス主義社会学」の双方の理論の下部構造(Infrastructure)に注目して、西欧社会学の危機の諸相をとらえていくA・W・グールドナーの「反省の社会学」(Reflexive Sociology)[2]や、資本主義の構造把握を古典理論へさかのぼって見ていくA・ギデンズ[3]や、現代社会の危機を多面的な視角からとらえ、認識と利害関心、正当化の危機やコミュニケーションなど幅広い問題関心を展開していくフランクフルト学派のJ・ハバーマス[4]などがあげられるであろう。

しかし、こうした「パラダイムの危機」という考え方が社会学の理論的方向で受け入れられてきている一方で、なお反省を強いられるような具体的な課題もいくつか考えられるように思われる。その一つが本稿で検討しようと考えている現代社会学の方法における反省を基軸として、生活史研究(Life-History Approach)の視角(パースペクティヴ)を位置づけるという課題である。生活史という用語はもちろん英語のライフ・ヒストリー(life-history)に対応しているのであるが、一応「人間個人を中心にした生命・生活史」という意味で用いることにする。[5]つまり、生活史研究の持つ意味として、歴史の視点、個人中心的アプローチ(person-centered approach)、生命=生活研究という方向性が含まれているわけである。

まず、現代社会学の方法に対して理論研究における反省と社会調査論における反省の両面から生活史研究をとりあげる意図を明らかにしておこう。理論研究の反省点としては第一に、現代社会学において近代を相対化する「歴史」の視点が欠落してきたということがあげられる。社会学的人間像が、近代、現代を担う産業社会あるいは脱工

業化社会の人間たちであったにしても、具体的な人間は歴史から切れて存在しているわけではない。例えば、行為論において目的合理的や価値合理的ではない伝統的行為についての考察の不足や、非合理性、情動性に対する感覚の乏しさという点にも表われているし、都市社会学においても伝統的な社会組織や社会関係の問題はとかく軽視されがちであった。この「歴史」の問題は、社会変動論や歴史社会学において最近特に見直され、再検討が迫られているが[6]マクロ社会学的な視点からだけではなく、個人の社会生活にとっての「歴史」というミクロ社会学的な課題もまた重要である。また、理論研究の第二の方向として、個人の主観性を基礎に現象学的社会学による「日常生活世界論」も盛んであるが、こうした「リアリティの構成理論」[7]の中でも、具体的な個人の生活史を扱う分析枠組は出てきていない。こうした中で反省点の第三は「個人」の全体性をいかに扱っていくかということである。方法的個人主義か方法的全体主義かという議論においても、ともすれば具体的な人間の持っている生命＝生活の全体性を忘れてきたのではないかという反省である。生活研究や生活構造論など、確かに具体的な生活の場面に対する研究の蓄積も進んできてはいるが、経済学的手法や構造―機能主義的アプローチに基づいた、いわば「生活の断面図」といった傾向[8]が強いように思われる。例えば、職業・労働生活、消費生活、余暇生活というように現代の生活研究は細分化され、より専門化されていく傾向にある。しかし、統計的に処理できない、一人の人間の生活を追い続けることにも社会学的意義があると考えられる。

またこの問題は、社会調査論における反省点と直結している。まず第一に社会学史の中で、実証的研究の系譜としての社会調査史の位置づけが不明確であり、とりわけ参与観察法（participant observation method）や生活史法に基づくシカゴ学派や文化人類学の成果が、現代の社会調査論においてあまり生かされていないということがあげられる。また第二には、調査者と被調査者の関係性、統計的に処理できない質的なデータの分析方法など生活史調査に

よって提起される幾つかの問題は、社会調査論の重要な課題になると考えられるのである。

以上のように、現代社会学の方法に対するさまざまな反省の上に立って、生活史研究という非常に広範な領域にまたがるアプローチの幾つかの視角を検討していきたい。従来の社会学、経済学、社会福祉、歴史学、心理学、文化人類学、民俗学などのさまざまな生活史研究への関心をいくらかなりとも整理して、歴史的系譜や今後の展望についても触れるつもりである。したがって、現代社会学に対する批判と反省から出発しつつも、あまり社会学の個別領域にこだわらずに、生活史的パースペクティヴの持つ意味について探っていきたいと考えている。

(1) T・クーン(中山茂訳)『科学革命の構造』みすず書房、一九七一年。尚、拙稿「批判的社会学の知識構造—パラダイム概念を軸として—」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第二〇号、一九八〇年三月、も参照。

(2) Gouldner, A. W., *The Coming Crisis of Western Sociology* (New York: Basic Books, 1970). (岡田直之他訳『社会学の再生を求めて』新曜社、一九七四年。)

(3) Giddens, Anthony., *New Rules of Sociological Method.* (New Ynk: Basic Books, 1976) 及び *Central Problems in Social Theory* (Berkeley: University of California Press, 1979.)

(4) J・ハバーマス(細谷貞雄訳)『晩期資本主義における正統化の諸問題』岩波現代選書、一九七九年。山本啓『ハーバマスの社会科学論』勁草書房、一九八〇年。

(5) 桜井厚「社会学における生活史研究」『南山短期大学紀要』第一〇号。一九八二年一二月、では「日本語の「生活」では生物学的次元での「生命」の意味がややもすると抜け落ちる嫌いがあるので、われわれが「生活史」というとき、ライフ・ヒストリー=生命・生活史のことであると理解しておきたい。」(三三頁)と述べており、ここでもこの定義を踏襲していきたい。

(6) 鶴見和子・市井三郎編『思想の冒険—社会と変化の新しいパラダイム—』筑摩書房、一九七四年。Shils, Edward., *Tradition,* (Chicago: The University of Chicago Press, 1981) Abrams, Philip., *Historical Sociology.* (England: Open Books, 1982.)

(7) Berger, P. L & Luckmann, T., *The Social Construction of Reality.* (New York: Doubleday & Company, 1966)(山口節郎訳『日常世界の構成』新曜社、一九七七年。)

(8) 青井和夫・松原治郎・副田義也編『生活構造の理論』有斐閣双書、一九七一年。

二　生活史研究の歴史的概観

生活史の手法そのものは、社会学に限らずさまざまな分野で比較的古くから活用されてきたが、研究方法として意識的に導入されだしたのは、一九二〇年代からと考えられる。社会学及び社会心理学などの領域でそのような意味で研究法の画期をなしたとされるのは、トーマスとズナニエツキの『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』（一九一八―二〇年、二巻一九二七年）の出現であった。この『ポーランド農民』に使われた個人の生活記録は、五〇組の家族の手紙と、一人のポーランド人移民に書かせた自伝である。そして内容的には、方法論ノート、ポーランド農民社会と移民のアメリカでの社会的解体・再組織化を扱ったモノグラフの部分、そして自伝の資料篇などに分かれているが、必ずしも生活史資料と方法論とが整合的に整理されているわけではなかった。[1] しかし、トーマスとズナニエツキの研究に刺激されて、一九二〇年代から三〇年代にかけて、パークおよびバージェスに先導されたシカゴ学派の人々が、社会調査法としての生活史法を積極的に取り入れるようになったのである。人間生態学の旗の下で、社会踏査法（survey）や参与観察法とともに生活史法をも活用しながら、都市のスラムやゲットー、ギャング集団、非行や犯罪研究、社会病理の研究などを展開していった。例えば、ショウの代表的な研究『ジャック・ローラー』（一九三〇年）においては、非行少年スタンレー自身の話や彼によって書かれた生活記録に対して、詳細な注記や犯罪学的なコメントが付されているのである。

このような一九二〇年代から始まった生活史研究の第一期は、文化人類学においても、有名なラディンの『雷鳴―あるアメリカインディアンの自伝』（一九二六年）などのように、方法論的発展とは別に資料の蓄積がなされた時期として位置づけることができる。そして一九四五年までに、生活史研究の位置づけと評価がさまざまな分野でな

された。アメリカ社会学における生活史研究の概観が、社会科学調査評議会（Social Science Research Council）の委託を受けた一連のレポートからうかがうことができる。社会心理学の分野では、オールポートの『心理科学における個人的記録の利用法』（一九四二年）、トーマスとズナニエッキの『ポーランド農民』に対しては、ブルーマーの『社会科学における調査の批判』（一九三九年）、また歴史学、人類学、社会学の分野では、ゴットシャーク、クラックホーン、エンジェルの『歴史学・人類学・社会学における個人的記録の使用』（一九四五年）などが出され、またバージェスも「社会学研究法」の中で生活史法を生物学における顕微鏡の役割になぞらえて「個人を中心にしたコミュニケーションの記録」の重要性を指摘している。(2)

これらの社会科学的な評価と方法論としてのさまざまな問題については省略せざるを得ないが、結局、第二次世界大戦後、一九六〇年代までは生活史研究は衰退していくのである。戦後の社会科学、特にアメリカ社会学の流れでは、行動科学、機能主義の隆盛に伴って計量的、大量調査の手法が圧倒的になり、個人的生活記録の事例を収集する質的調査法はあまり省みられなかった。社会調査方法と社会学理論の動きの相互関連を考察しようとしたG・イーストホープは『社会調査方法史』（一九七四年）の中で、この衰退の理由として「第一に、生活史は独特な資料であったが、社会生活の規則性を探し出すことはできなかった」点と「第二には、生活史法によって得られる資料を、他のより簡単な方法によって引き出し得ることが示されたから」という二重の要因を挙げている。(3) いずれにしても、文化人類学におけるO・ルイスの仕事(4)を除いては、一九四五年から一九六〇年代までの第二期は生活史研究の衰退期として位置づけられるように思われる。

そして、一九六〇年代後半ぐらいから現在に至るまでが、いわば第三期として生活史研究の再興期に入っているように考えられる。この時期には、生活史の事例の収集だけにとどまらず、質的調査法や調査行為、調査の倫理的

問題にかかわる研究方法論、あるいは個人の「アイデンティティ」や「日常意識」などにかかわる精神分析学や現象学との接点、さらには社会変動の担い手としての個人の役割などさまざまな方向が模索されてきている。このような新しい方向性の模索は、一九七八年、スウェーデンのウプサラで開かれた第九回世界社会学会議でのライフ・ヒストリーアプローチのワーク・ショップにもまとめられている。[5] そこでは、(1)認識論的・方法論的問題、(2)生活物語（ライフ・ストリー）についての試み、(3)歴史的データとしての生活史（オーラル・ヒストリー）（口述生活史）の三部に分かれて自伝や伝記、口述生活史などと社会学研究法の課題が検討されている。こうした生活史研究の歴史的概観を踏まえて、現在再興しつつある第三期の生活史研究の視角について、筆者なりの検討を加えていきたいと考えている。

(1) W・I・トーマス・F・ズナニエッキ（桜井厚訳）『生活史の社会学―ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民―』御茶の水書房、一九八三年。において『ポーランド農民』の抄訳とH・ブルーマーの論評、そして訳者自身の「生活史研究の課題」を付している。尚、水野節夫「初期トーマスの基本的視座―『ポーランド農民』論ノート（一）―」『社会労働研究』第二五巻第三・四号、一九七九年二月。同「『ポーランド農民』の実質的検討に向けて―『ポーランド農民』論ノート（二）―」『社会労働研究』第二六巻第二号、一九七九年一二月も参照。

(2) バージェス（内藤莞爾訳）「社会学研究法」ギュルヴィッチ＝ムーア編（東京社会科学研究所監訳）『二十世紀の社会学』Ⅳ所収、誠信書房、一九五九年。また、桜井厚、前掲、及び江馬成也「ライフ・ヒストリー分析への一試論」『東北大学教育学部研究年報』第四集、一九五六年三月も参照。さらに、Langness, L. L., *The Life History in Anthropological Science*, (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1956) では、人類学における生活史研究の経緯を、(i)一九二五年までのライフ・ヒストリーの使用…非専門的な情緒的・小説的な使用、(ii)一九二五年―一九四四年までの使用…E・サピア、P・ラディンに代表される研究、(iii)一九四四年～現在までの使用…C・クラックホーンの要約、「文化とパーソナリティ」研究、の三つの時期に分けている。

(3) Easthope, Gary, *A History of Social Research Methods* (London: Longman, 1974) p91.（川合隆男・霜野寿亮監訳『社会調査方法史』慶應通信、一九八二年、一〇九頁）。

(4) オスカー・ルイス（高山智博訳）『貧困の文化―五つの家族―』（一九五九年）新潮選書、一九七〇年。同（柴田稔彦・行方昭夫訳）『サンチェスの子供たち一・二』（一九六一年）みすず書房、一九六九年。同（行方昭夫・上島建吉訳）『ラ・ビーダ一・二・三』（一九六五・六六年）みすず書房、一九七〇・七一年。

(5) Bertaux, Daniel, eds, *Biography and Society: The Life History Approach in the Social Sciences* (California: SAGE Studies in International Sociology 23 International Sociological Association/ISA, 1981).

三　生活史の主題と方法の交錯

生活史研究に対する関心の示し方は、大きく分けると二つの軸が設定できるように考えられる。第一は、社会学、あるいは歴史学、文化人類学、心理学などにおいて、生活史を聞き取りしたり、自伝を書いてもらったり、その人の書き残した自伝、日記、手紙、作品などのさまざまな生活史の資料を用いるという研究方法上の関心である。例えば、社会学では前述したように統計的に処理できない質的なデータとして生活史調査の意義を見直そうという動きがあるし、歴史学においても、従来の文献史学に対して、「一回性のない歴史」記述としての民俗学や社会史[1]に対する関心が高まっている。また、心理学や文化人類学では、ある個人の生活史から、文化の型やパーソナリティを類型化し、文化構造や心理構造を理解するための方法として生活史の事例を収集するということもある。

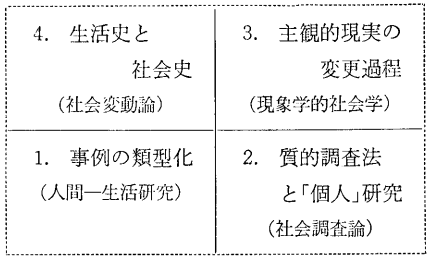
このような研究方法上の関心に対して、第二の軸は、何と言っても、ある特定の人間の生活史の内容や主題に対する興味である。生活史研究は、ほとんどの場合、歴史上有名な人物よりはむしろ、名もない庶民の一生の方に関心を持っている。これは、歴史や文化や社会との相互関係の中で、個人がどのような生き方をしてきたのか、誰にでもあるような経験をいかにその人自身が独自に意味づけているかということを研究者が発見してみたいということなのかもしれない。いずれにしても、ある特定の個人の職業や業績や家族、親族、集団や地域社会とのかかわり方などの事実的側面から、その人間が経験し、記憶しているさまざまな事柄や人間関係に対する意味付与に至るまで、生活史の主題・内容に関する興味が存在しているのである。

したがって、一方の方法の軸では、聞き書きや自伝(autobiography)、伝記(biography)、日記、手紙、作品などの生活史資料を集めるというデータ収集から、集まったデータから生活史を再構成し、記述し、解釈するという分析

の方法までが課題となってくるし、他方の主題の軸では、ある特定の個人生活史の客観的事実の側面とその事実を主体がどのように意味づけているかという主観的意味付与の面とが区別できるのである。そこで、方法の軸と主題の軸を交差させて、生活史研究の四つの視角を図示してみると第1図のようになる。

まず、方法におけるデータ収集と主題における客観的事実に関心を集中していくと、生活史事例の類型化という視角が生まれてくる。このパースペクティヴは、人間の生活を歴史的、時間的な視点でとらえ直し、生活過程の把握や移動経歴、家族形成史などにおいて統計的な研究も可能であることから、広い意味での「生活研究」として位置づけられる。次に方法においては、同じくデータ収集に関心があるが、主題においては、主体（被調査者）の主観的意味付与を重要視する視角は、明らかに社会調査論の中でも、質的調査法に属するテーマである。従って、自由面接法（informal interview method）や参与観察法などと同様に、調査者と被調査者との社会関係や調査の個人的、政治的、倫理的問題[2]などが調査行為にかかわる課題として存している。さらに第三の視角は、生活史の内容の主観的意味付与を記述し解釈する、その方法を模索しようとする観点である。ここでは、特に主観的現実（リアリティ）の社会的構成と、そうした意味システム（あるいは解釈のパラダイム）の変更過程に関心が集中される。生活史の主体が語るライフ・ストーリーは常に、現在時点から過去を回想する形でなされるが、日記や手紙・作品では断

第1図　生活史研究の4つの視角



片的ながらも、その時点での意味システムを示している。そこで可能ならば両者の資料を複合的に使用することによって、解釈の方法を採ることもできるのである。その意味で、この第三の視角は、現象学的社会学のパースペクティヴに近いものと思われる。最後の第四の視角は、もう一度、主題において客観的事実の側面にもどって生活史のデータを解釈する場合であり、生活史と社会史との接点が問われてくるものである。つまり、ある個人が総体として社会の変動とどのようにかかわってきたのかという社会変動論への関心が含まれている。

以上のような生活史研究の四つの視角は、むろん実際には、画然と区別されうるものではなく、相互に関係を持ちながら重層的な形で各々の生活史研究の中に包含されているように思われる。したがって、ここでは単に操作的に、理念型として主題の軸と方法の軸を交差させて四つの視角を取り出してみただけである。また、これらのパースペクティヴはお互いに他を前提としたり、次のパースペクティヴの中に進入していったりすることもある。例えば、生活史事例の類型化は、客観的なデータの収集という意味では、研究の出発点でもあるが、主観的な現実や被調査者との親密な人間関係を経て、社会変動の担い手としての一個人を設定しうるならば、新しい人間類型として生活史研究を展望していくことも考えられるのである。[3] その意味ではこれらのパースペクティヴの重層的循環が要求されているように思われる。

(1) 中井信彦『歴史学的方法の基準』塙書房、一九七三年。同「史学としての社会史—社会史にかんする覚書—」『思想』第六六三号、一九七九年九月号も参照。

(2) Faraday, Annabel., and Plummer, *Kenneth.*,: *Doing Lije Histories*, *The Sociological Review*, Vol. 27 No. 4 November 1979 によると、生活史の問題領域は、(1)社会科学の問題、(2)実際的・技術的問題—データの収集と分析、(3)倫理的・政治的問題、(4)個人的問題に区分されている。また、(3)、(4)の問題については、Bulmer, Martin, eds, *Social Research Ethics*, (Hong Kong: Macmillan Press 1982) 及び Beauchamp, Tom L, Faden, Ruth R. Wallace, Jr, R. Jay and Walters, LeRoy eds., *Ethical Issues in Social Science Research*. (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1982) も参照。

（3）中野卓「個人の社会学的調査研究について」『社会学評論』一二五号（第三二巻第一号）一九八一年六月。尚、鶴見和子「書評中野卓編著『口述の生活史』」『社会学評論』一二八号（第三二巻第四号）一九八二年三月、も参照。

四　生活史研究の四つの視角

(一)　生活史事例の類型化（生活研究）

第一の視角である生活史事例の収集と類型化は、社会学の非常に広範な範囲にわたっている。社会学の実証的な調査研究では、ある社会事象の変化の過程（プロセス）を探る上で、時系列的なデータが必要不可欠である。ある地域社会の変動過程を考察する場合には、行政区域の問題はあるにしても、基本的な人口（年齢・性別）構成や世帯規模、家族構成、職業構成、居住歴、居住形態などの時系列データをきちっと把握した上で地域住民の生活過程の変化の問題に入っていくわけである。そこで、生活史の事例を聞きとりによっていくつか集め、そしてそれらのケースを他のケースと比較しながら類型化していくという方法をとる。したがって、第一の視角においては、生活史の事実の側面がいくつも比較され、研究者の問題関心にしたがって類型化される点が特徴的である。

このような生活史研究の第一の視角に属する諸研究はおそらくかなりの数にのぼると思われるが、以下では六つのテーマを列記してみたい。その第一は、労働者生活や貧困研究の中での生活史への注目である。篭山京[1]、中鉢正美[2]、あるいは布施鉄治[3]らの膨大な研究蓄積の中に、「貧困層の創出過程」、「生活構造の履歴現象」あるいは「生活過程と生活史・誌」などのテーマで扱われているものである。これらに共通して見られるのは、階層的視点や生活構造とその変動という社会経済的な背景と個人の生活史を重ね合わせるという視点であろう。第二のテーマは、第

一とも重なり合っているが、家族生活史やライフ・コース論である。森岡清美[4]らの家族周期（ライフ・サイクル）の研究や国民生活センター（岡田政子[5]）の『都市家族の生活歴』などはまさに生活史の事実的側面（家族歴・居住歴・職業歴）を重視した事例の収集と類型化を志向している。さらに、最近のG・エルダーのライフ・コース論[6]も、ライフ・サイクルよりは、より個人の生活史に即した家族研究を目ざしているように思われる。第三には必ずしも生活史だけに注目するわけではないが、小集団研究との接続があげられる。従来の参与観察法では、W・F・ホワイト[7]やR・P・ドーア[8]、あるいはきだみのる[9]などのように特異な研究者による「内側」からの優れた観察と分析は示し得るが、研究方法としての一般化はかなり困難な面があった。しかし、松平誠[10]は都市祭礼集団の実証的研究を積み上げていきながら、「集団参加観察」や「集団の口述生活史」の方法を模索しており、中野卓[11]の個人生活史と集団との社会関係の視点とも合わせて、注目されるものである。第四のテーマは、当然前述した第一、第二のテーマの中に含まれるものであるが、特に社会移動（職業移動・地域移動[12]）に注目した移動経歴というテーマである。移動過程や移動効果を考える上で、個人の生活史の事例は非常に有効なデータとなりえる。さらに第五のテーマとしては、文化人類学からの影響として地域社会の変化と個人の生活史を重ね合わせて、地域生活の変貌をとらえるという視点がある。例えば、加藤秀俊・米山俊直[13]らの研究や祖父江孝男[14]などに見られるし、和崎洋一[15]のユニークな地域社会研究にも表われている。最後に生活史を通して、社会問題や社会運動に結びつくテーマを扱っている一群の研究者がいる。R・J・リフトンの「歴史心理学的（サイコ・ヒストリアン）研究[16]」によるヒロシマ原爆体験や中国の文化大革命の精神史的な考察にも表われているが、直接的には石田忠[17]らの長崎被爆者の生活史を追っていく中で、〈漂流〉から〈抵抗〉への運動論的な視点が如実に示されているわけである。以上、非常に簡単ではあったが、生活史事例の収集と類型化を志向する第一の視角に含まれる六つのテーマを列記してみたが、次に社会調査論の視角から見ていくこと

にしよう。

(二) 質的調査法と「個人」研究（社会調査論）

生活史研究の第二の視角は、生活史のデータを収集し、記述する際に、そのライフ・ヒストリーの主体の主観的な意味付与を問題とする立場である。ある人間の生活史を口述によって語ってもらい、調査者がテープや聞き書きの手法で記録する場合や、当人の半生や出生以来の長期間の生活史でなくても、ある体験や事件、職業や家族や地域とのつながりなどを断片的に聞き取る場合や、一日の生活あるいは一週間、一月、一年の生活記録だけを聞き取る場合などさまざまな生活史調査の場合が設定できるが、これらはいずれも話者が被調査者として設定できる場合であり、その意味では「社会調査の行為」にかかわる部分である。それに対して、自伝や日記、手紙、作品などだけが残されていて、調査者が当人に会って聞き取りをすることができない場合には、そうしたデータの記述と解釈が重要な課題となってくる。その意味では、ライフ・ヒストリーの主体は記述者であり、研究者との記述を通しての相互作用を経た「社会調査の記述」が問題となってくるわけである。

そこで、生活史法だけではなく、自由面接法や参与観察法も含めた質的調査法[18]と「個人」の社会学的な研究という観点で社会調査論の三つのテーマを提起しておきたい。第一には、調査者―被調査者関係を含む「調査行為論[19]」の問題である。口述の生活史の場合には、例えば、話者が語り、調査者が聞き出すという相互行為そのものが、生活史研究を成り立たせているのであり、その意味では、主体と調査者との共同作品として位置づけることも可能である[20]。また、調査過程と調査行為を明らかにすることによって、そこから得られたデータの分析結果に対しても影響を持つものと考えられるのである。調査者が常に調査する側、研究する側に立つばかりではなく、調査の過程と

相互作用を通して、時には調査される側、研究される側の立場にも身を置くことにもなる。そこでは、調査者と被調査者が共に「生き」、共に「考える」ということも生まれるのではないだろうか。第二に、調査の行為及び記述が、多面的かつ重層的にならざるをえないという点である。参与観察の場合でも、生活史法においても、調査者は当初「よそ者」[21]として被調査者に接触するわけである。小集団研究や地域社会研究で、当該集団の中での「よそ者」をインフォーマント（情報提供者）として選ぶケースもあるが、この「よそ者」性こそがある意味では、社会調査の鍵になってくることもある。何故ならば、対象の内側にできるだけ入り込みたいと思う専門的な「よそ者」[22]としてのフィールド調査者は、「よそ者」であるが故に、ある人間や集団を取り巻く社会的状況の全体性を考察しなければならないからである。O・ルイスの「羅生門」式手法[23]なども、このような意味で多面的及び重層的な社会調査方法の一つであると思われる。生活史研究の視角としての社会調査論の第三のテーマは、記述自体が主題化されるという点である。調査行為にかかわる問題にしても、調査過程でのさまざまな試行錯誤についても、ほとんどの社会学的な実証研究についてまわる問題ではある。しかし、このような調査経過は、調査結果と分析に対してはほとんど影響がないものとして、意識的に叙述されることはほとんどない。ところが、生活史研究では、話者が語る生活史をどのように記述するか、主体が書き綴った自伝、手紙、日記などの生活史資料をどのような形で記述していくのかということがまさに主題の問題として浮かび上がってくるのである。生活史そのものに対する興味が、他の誰のようでもない個人の個性と主体性に向けられているのであれば、当然研究者の側の個性と主体性も問われてくるライフ・ストーリーの叙述形式が考えられなければならないし、さらに、データの共有という意味での記述の比較対照も今後必要になってくるのではないだろうか。

(三) 主観的現実の変更過程（現象学的社会学）

生活史のデータを収集する段階から、それらのデータを解釈するという方法的段階になってくると、主題と方法の双方から現象学的パースペクティヴが要求されるようになる。そこで第三の視角として、現象学的社会学の生活史に対するアプローチをとりあげることにしよう。A・シュッツは「多元的現実論」[24]において、「至高の現実」としての日常生活の現実のほかに、「限定された意味領域」としての非日常的な現実（例えば、夢、幻想、科学、宗教、神話など）を設定し、その間のリアリティの移行について論じている。またP・バーガーらは、日常生活の内部での主観的現実の移行やそれに伴う「自明性」の危機について論じている。[25]このような現象学的社会学の概念は、生活史を解釈する上で非常に有効な概念装置を与えてくれるように思われる。そこで、生活史の解釈にあたって重要であると思われる三つの概念について少し説明していくことにしよう。

第一は、主観的現実の維持と変更という点である。バーガーによれば、出来事が選択され、それに意味を与える主観的現実の解釈枠組を「意味システム」と呼んでいるが、それは通常、社会的に維持されている。しかし、個人の人生の主要な転機(turning)に際して、この「意味システム」が変更される。この意味システムの変更を「態度変更」あるいは「翻身」(alternation)と呼ぶ。こうした態度変更の典型としては、自己の宗教的、イデオロギー的世界観の転向(conversion)があげられるのである。生活史を解釈しようとする時、このような主観的現実の意味システムが、いつ、どのように形成され、維持され、変更されていったのか、その転機や態度変更は何によって引き起こされたのか、さらに、過去を回想して口述する場合には、現在の意味システムからの解釈であることをも考え合わせて研究者による再解釈の試みがなされなければならないのである。第二の概念は「重要な他者」(significant others)

の存在である。意味システムの社会的維持に際して、準拠集団や社会構造が持つ機能については言うまでもないが、意味システムの変更や新しい主観的現実の維持に際しては、この重要な他者の存在の有無が注目される。態度変更は、多かれ少なかれ他者との社会関係の上に展開される。偶発的な場合もあるし、自らの意志と欲求に基づいた変更もあるであろう。しかし、決定的な態度変更であればあるほど、重要な他者の存在が自己との関係の上で登場してくる事が多い。例えば、宗教的な回心（conversion）の場合には、教祖との交流や超越的な宗教体験など「重要な他者」が象徴的意味を持つことがあり、その意味では「お大師様」や「お稲荷さん」も象徴的な意味で重要な他者として位置づけることもできるのである。第三に、新しい社会的状況を克服しながら、アイデンティティ（自己の同一性）の連続性を保つために、個人が自律化していくという考え方である。従来、社会化（socialization）の概念の中に、個人が幼年期に経験する第一次的社会化と、その後の第二次的社会化ないしは成人の社会化（adult socialization）とが含まれているわけだが、個人の生活史を主観的現実の側から解釈し直していくと、常に個人が受動的に、社会の現実を内在化させていくという過程ばかりではない。時には客観的現実を拒否し、それに抵抗し、社会構造に対する変動の要因をも提供する場合がある。このように、各個人は困難な状況をいかに切り抜けるかというその人なりの主体性という意味での「適応ストラテジー」[26]を持っており、第二次的社会化の中で自律化していくわけである。以上のような生活史の解釈に有効なさまざまな現象学的社会学の概念は、実際の生活史の事例とのつき合わせの上で、より一般化され、抽象化された概念装置へと展開される必要があるものと考えられる。

㈣　生活史と社会史（社会変動論）

生活史研究の第四の視角は、個人が社会構造や社会変動とどのようにかかわっているかを再び生活史の事実の側

面からとらえ直していこうという立場である。しかし、その際に第一の視角のように、生活研究という枠で事例を収集し、類型化するわけではない。個人の生活史を、家族、職業・労働、地域社会、集団などの社会学的な枠組で分類するのではなく、人間の生涯に即した形やその人自身の重要な意味を持つ事件や体験から社会の歴史を再構成していこうという考え方である。

そこで、社会史との接点を考える意味で生活史のテーマを分類してみると、次の三つの形に整理できるように思われる。第一には、人間の生涯（一生）に即した経験の歴史＝生活史というとらえ方である。例えば、出産、育児、遊び、学校、就職、結婚、移動、病気、死などのテーマで生活史を見ていく方法である。これに対して第二のテーマは、人と物とのかかわり合いを軸に生活史を追うという方向である。柳田国男は『民間伝承論』（一九三四年）及び『郷土生活の研究法』（一九三五年）において、民俗資料をⅰ生活外形（生活技術誌＝有形現象）―目の採集＝旅人の採集、ⅱ生活解説（言語の知識＝言語芸術）―耳と目の採集＝奇寓者の採集、ⅲ生活意識（心意現象）―心の採集＝同郷人の採集の三つに分類しているが[27]、人間と物とのかかわり合いという意味では、ⅰの生活外形＝有形現象に当たるものである。例えば、自然とのかかわり合いとして、漁、狩、林、農などがあるし、日常生活としては、衣、食、住、あるいは道具、工具、民具などであり、そうした物や技術の介在人として、職人、工人、狩猟民、水上生活者、技芸者集団などがあげられる。社会史との接点という観点から、生活史のテーマを整理する第三の見方は、人間と集団や事件、運動とのかかわり合いからとらえていく視点である。例えば、戦争や災害という非常にマクロ的な社会史と個人の生活史がどのような関連を持っていたかというテーマだけでもかなりたくさんの視角を含んでいる。戦争体験と一口に言っても、戦地での体験、空襲、軍隊内の体験、学童疎開、飢餓体験などまさにさまざまである。このような個人の体験はそれ自体一回限りのものであるが、にもかかわらず、社会史的な事実とのかかわり合いに

おいて、民俗学とはまた違った意味で、「伝承」の対象になりうる。社会学的な歴史では、個人の一回限りの体験でも、生活史の中で重要な意味を持つ限り、「伝承」の対象になるからである。

それでは、社会史の意義はどのようなものであろうか。ここでは、ル・ロワ・ラデュリ[28]などのフランス「アナール派」の方法の特徴として簡単に五つの点をあげてみたい。まず第一に長期的波動や数量的把握が目ざされている事である。歴史人口学を基点として気候や環境などの数量史的アプローチがなされている。第二は、物質文化や日常生活の歴史に重点が置かれている点である。子供たちの世界、結婚や出産や育児、住居や学校、都市や農村の慣行、習俗などがとりあげられている。第三は、文献資料以外の口述資料、伝説、民話などの資料を重視している。これは民俗学が社会史と結びつく有効な方法と考えられる点である。社会史の意義の第四点は、集団史、事件史、運動史などを手がかりとして政治史や経済史とは異なった社会、文化史の領域を確立させようとしている事であろう。そして最後に第五点としては、何よりも表面的な既成の歴史区分ではない、深層史を志向している点である。つまり精神史、心理史などの心意現象をつかむことが要求されているわけである。このような意味で生活史のパースペクティヴは社会史の視点とも重なってくるものと考えられる。

(1) 篭山京『戦後日本における貧困層の創出過程』東京大学出版会、一九七六年。また、篭山京編『大都市における人間構造』東京大学出版会、一九八一年も参照。
(2) 中鉢正美『現代日本の生活体系』ミネルヴァ書房、一九七五年。
(3) 布施鉄治編著『地域産業変動と階級・階層—炭都夕張／労働者の生産・労働—生活史・誌—』御茶の水書房、一九八二年。布施鉄治・岩城完之・小林甫「生活過程と社会構造変動に関する一考察」『社会学評論』九九号(第二五巻第三号)一九七四年一二月。
(4) 森岡清美『家族周期論』培風館、一九七三年。
(5) 国民生活センター編『都市家族の生活歴—社会変動とライフ・サイクル—』ドメス出版、一九七六年。
(6) Elder, Glen, History and the Life Course, in Bertaux, Daniel eds, *op. cit*,

(7) W・F・ホワイト（寺谷弘壬訳）『ストリート・コーナー・ソサイエティ』垣内出版、一九七九年。
(8) R・P・ドーア（青井和夫・塚本哲人訳）『都市の日本人』岩波書店、一九六二年。
(9) きだみのる『気違い部落周游紀行』冨山房百科文庫、一九八一年。同『にっぽん部落』岩波新書、一九六七年。
(10) 松平誠「都市の社会集団―〝まつり〟を準拠点とする実証研究（その3）―『応用社会学研究』第二三号、一九八二年三月。同「都市の社会集団―府中祭礼集団にみる町内（まちうち）の実証的研究―」『応用社会学研究』第二四号、一九八三年三月。
(11) 中野卓「大正期前後にわたる漁村社会の構造変化とその推進力」『村落社会研究』第四集、塙書房、一九六八年。同編『明治四十三年京都―ある商家の若妻の日記―』新曜社、一九八一年。同・小平朱美『老人福祉とライフ・ヒストリー』未来社、一九八一年。
(12) 鈴木広編『コミュニティ・モラールと社会移動の研究』アカデミア出版会、一九七八年。また、社会移動とライフ・ヒストリーに関しては、Carr-Hill, R. A. and Macdonald, K. I. *Problems in the Analysis of Life Histories*, *Sociological Review Monograph* (University of Keele) No. 19, 1973. p57-95 を参照。
(13) 加藤秀俊・米山俊直『北上の文化―新・遠野物語―』（現代教養文庫）社会思想社、一九六三年。加藤秀俊「個人史による地域社会研究」『人文学報』第二六号、一九六七年一一月。
(14) 祖父江孝男「村の生活はどう変わったか―ライフ・ヒストリーによる分析―」同著『文化とパーソナリティ』所収、弘文堂、一九七六年。
(15) 和崎洋一「地域社会の研究」『人文学報』第二一号、一九六五年一二月。和崎は、この中で「個人のライフ・ヒストリーの投影によって浮びあがってくる地域社会」を、自分自身も調査対象者として記述していくという、調査者＝被調査者の手法を用いている。
(16) ロバート・J・リフトン（小野泰博・吉松和哉訳）『終りなき現代史の課題』誠信書房、一九七四年。
(17) 石田忠編著『反原爆―長崎被爆者の生活史―』未来社、一九七三年。同編『続反原爆―長崎被爆者の生活史―』未来社、一九七四年。
(18) Bogdan, Robert and Taylor, Steven J., *Introduction to Qualitative Research Methods*, (New York: John Willey & Sons. 1975)
Schwartz, Howard and Jacobs, Jerry, *Qualitative Sociology*, (New York: The Free Press, 1979)
(19) Denzin, Norman K., *The Research Act: A Theoretical Introduction to Sociological Methods* (Chicago: Aldine Publishing Company, 1970) Denzin, *Sociological Methods: A Sourcebook*, (New York: McGraw-Hill Book Company, 1970) また、Johnson, John M. *Doing Field Research* (New York: The Free Press, 1975) では、調査の人間関係がデータの収集や分析結果に及ぼす影響について論じている。やはり、Becker, Howard S. and Geer, Blanche, Paticipant Observation: The Analysis of Qualitative Field Data, Adams, R. N and Preiss, J. J, eds, *Human Organization Research* (Illinois: Dorsey Press, 1960) では、被調査者の自発性が、調査者に指示されてか、また被調査者の言明（statement）か、行動かという区別を設けて調査過程と調査行為の規準を明らかにしている。
(20) 最も良い例として中野卓編著『口述の生活史―或る女の愛と呪いの日本近代―』御茶の水書房、一九七七年をあげることができる。

(21) アルフレッド・シュッツ（中野卓監修・桜井厚訳）『現象学的社会学の応用』御茶の水書房、一九八〇年の「他所者」によると、「他所者とは、私たちの生きるこの時代、この文明に属する成人とした個人を意味し、かれが接近する集団に永久的に加入しようとするか、少なくともその集団に許容されようとする立場にいる人を指す。」(三頁)となっている。

(22) Agar, Michael H., *The Professional Stranger: An Informal Introduction to Ethnography* (New York: Academic Press, 1980)

(32) オスカー・ルイス（高山智博訳）『貧困の文化』前掲、によると、「羅生門」式手法とは「家族をそのメンバー一人一人の目を通して捉えるアプローチの仕方である。これは、家族の各メンバーの長期的・集中的な自伝を通してなされる。」(一五頁)ということであり、O・ルイスはこの方法で『サンチェスの子供たち』や『ラ・ビーダ』において、離婚や家族崩壊や貧困などの危機的状態に対する対応のしかたを探っている。

(24) Schutz, A., On Multiple Realities, in *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, (The Hague: Martinus Nijhoff, 1971) アルフレッド・シュッツ（森川眞規雄・浜日出夫訳）『現象学的社会学』紀伊國屋書店、一九八〇年、A・シュッツ（佐藤嘉一訳）『社会的世界の意味構成—ヴェーバー社会学の現象学的分析—』木鐸社、一九八二年。及び片桐雅隆『日常世界の構成とシュッツ社会学』時潮社、一九八二年も参照。

(25) Berger, P.L & Luckmann, T, *op cit.*, P・L・バーガー（水野節夫・村山研一訳）『社会学への招待』思索社、一九七九年。生活史研究とバーガーらの主観的現実論について参考にしたものは、桜井厚、前掲及び渡辺牧「志向性の社会学序説」『ソシオロゴス』第六号、一九八二年六月、がある。尚、バーガー＝ルックマンの「リアリティの社会的構成」を図式化して知識社会学的に考察してみたのが、拙稿「批判的社会学の知識構造」前掲、の中にある。

(26) 前山隆『非相続者の精神史—或る日系ブラジル人の遍歴—』御茶の水書房、一九八一年、前山は「私のここで採り上げるストラテジーとは、個人的な意思決定に基づく、個人の生きざまに関わる方針である。」(一四頁)と述べている。尚、同『移民の日本回帰運動』(NHKブックス)日本放送出版協会、一九八二年、も参照。

(27) 柳田国男「民間伝承論」同「郷土生活の研究法」『定本柳田國男集第二五巻』所収、筑摩書房、一九七〇年。有賀喜左衛門「民俗資料の意味—調査資料論—」『有賀喜左衛門著作集Ⅷ民俗学・社会学方法論』未来社一九六九年。また、川合隆男「近代日本における社会成層研究の生成」『法学研究』第五〇巻第五号、一九七七年五月、も参照。

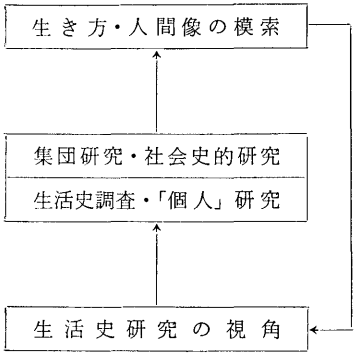
(28) ル・ロワ・ラデュリ（樺山紘一・木下賢一・相良匡俊・中原嘉子・福井憲彦訳）『新しい歴史〔歴史人類学への道〕』新評論、一九八〇年。また、ユルゲン・コッカ（早島瑛訳）「社会史の概念と方法」『思想』第六六三号、一九七九年九月号も参照。

五　結　語――生活史研究の課題――

今まで、現代社会学の反省と生活史研究の意義から出発して、生活史研究の歴史的概観の後に、第三期としての現在の生活史研究の視角について、主題と方法の交錯に基づいて四つのパースペクティヴを提示してみた。もちろん、これらの視角は相互に密接に関係し合っており、お互いが切り離せないものではあるが、しかし生活史研究の視角だけを提示してみても、残された課題は依然として大きい。中野卓は「個人の社会学的調査研究について」の中で次のように述べている。

「新たな人間像が模索されなければならなくなっています。このままでは人類の未来が危ぶまれるという懸念がありますが、こういうとき、既成の人間類型を立て変えて、個人についての新たな諸典型を提示する新しいタイポロジーが、社会学に必要となって来ていると考えますが、そのためにも個性ある生身の個人の研究がいま必要なのであります。……（中略）……個人のライフ・ヒストリーの諸事例を揃えるというのがその方法であります。それが、新しい人間類型の発見を可能にし、また、その自己形成された過程の分析を許すと考えているからであります。[1]」

第２図　生活史研究の課題



ここには、ある種の明確な方向性を持った研究意図が表われている。生活史に興味を持つことは人間に興味を持つことでもあり、未知の人間との「出会い」に興味を持つことでもある。そこで生活史研究の視角を

検討してきた上で、今後の課題を図で示してみると、第2図のようになる。まず、本稿で示した四つの生活史研究の視角は、相互にからまりながら、生活史調査・「個人」研究ないしは集団や社会変動などの実証的な研究へ向かっていかなければならない。そうしたフィールド・ワークや調査研究の中で、従来使われていた社会学理論や社会調査の網が生活史の事例に対して果たして有効でありえるか、また変更しうるならばどのようにすればよいかなどが検討されなければならない。そして、その上で、中野卓の言う「新たな人間像」あるいは「人間の生き方の発掘」[2]、「歴史における存在証明」[3]などが模索されることになる。生活史を見直すことは、とりもなおさず現在の自己のあり様を省みることであり、他者の生き方の中に自己の生き方を投影させながら、新たな人間像を模索していくという生活史研究の最初のパースペクティヴに回帰することにもなるのである。

(1) 中野卓「個人の社会学的調査研究について」前掲、八頁。

(2) 真木悠介『気流の鳴る音―交響するコミューン』筑摩書房、一九七七年、二八頁。

(3) 栗原彬『歴史とアイデンティティ―近代日本の心理＝歴史研究―』新曜社、一九八二年、一頁。